花　き

実　況

1　キ　ク

3 月、4 月上旬は寒い日と暖かい日が交互に推移した。後に比較的低温の影響で生育にばらつきがあった(図 1)。4 月上旬以降からは比較的、天気が良く、例年になく温暖であった。暮れ植え 5～6 月出し作型に用いられる夏ギクは、積算温度の到達に開花時期が強く影響を受けるため、開花が 7～10 日早い見込みである(図 2)。

あわら市では暮れ植えぎくの芽立ちの品種間差あり、「川風」「清風」が悪い。草丈 40～60cm で、一部の株は着蕾している。春植えギクの定植は4月 18 日頃から開始された。

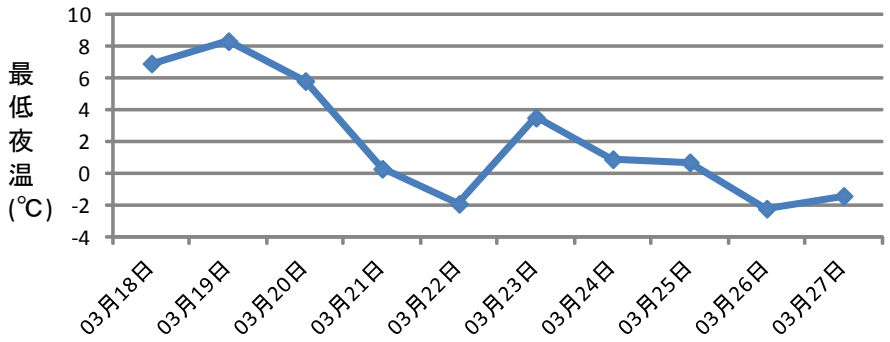

図1 3月下旬の大野市の最低夜温の推移

病害虫では、褐斑病、アブラムシが微発生、ハウス内では白さび病が少発生であった。

奥越地区の秋植え夏ギクの芽立ちは品種間差があり、「あかね」等の品種で芽とびが多くみられる。不織布被覆自体は 3 月中旬ころに多くの圃場で行われた。「小鈴」「シューペガサス」等は出芽が遅い。春植えギクは 4 月 13 日頃から定植が始まり、昨年より早い。4 月中旬の断続的な強風に、マルチめくれがみられた。病害虫では、黒斑病、アブラムシが微発生であった。ナモグリバエの食害痕は 4 月 13 日頃よりみられ、例年より早い。ネキリムシも例年より発生量が多い(写真 1)。降霜により、「精はなこ」「秀まこと」等の品種で葉やけがみられた。

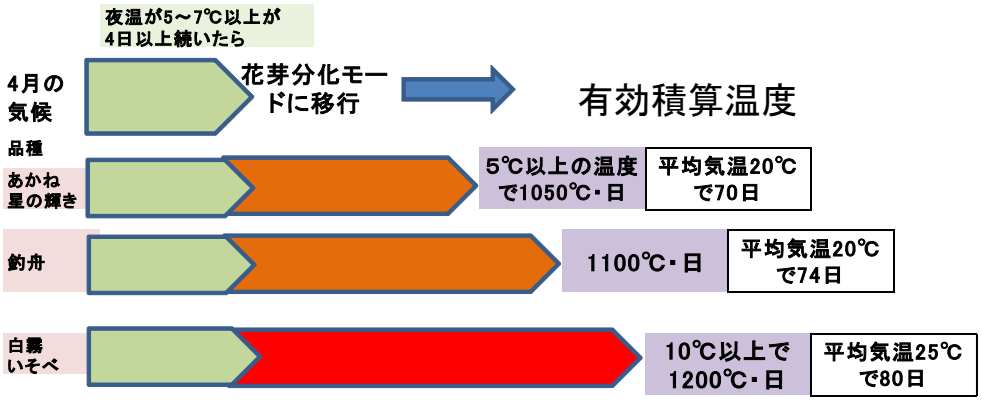

図2　夏ギクの開花までのイメージ図

写真 1　キク圃場で確認されたネキリムシ

福井市東郷地区では、春植え栽培で 4 月 10 日～20 日かけて定植された。品種は、「小鈴」「仙山」「小雨」「精のめぐみ」「精の曲」「新日本海」「大塚の紅」等であった。暮れ植えの草丈は 15～35cm で、病害虫ではアブラムシが多発、ナモグリバエ産卵痕を確認した。

大土呂地区では、4月14～16日に「小紫」「小鈴」「小雨」が定植された。

丹生の越前町宮崎地区では、4月15日時点で4月7～14日に定植が開始された。品種は「花風」「小鈴」「恋心」「花絵」「恋心」「やよい」「かなえ」「秀水」等である。4月17日の強風の被害は特になかった。

越前市では、4月15日調査で8月咲きの「はじめ」「秀光」「恋心」が3月下旬～4月上旬に挿し芽し、4月18日前後に定植された。本年は高温に推移したため、挿し芽後に腐敗するものがみられた。

二州地区では、8月咲き小ギクの「水鳥」「翁丸」「くれない」等が4月14日以降に定植された。病害虫では白さび病が一部で中発であるが、圃場によって発生が多い個所がある。

若狭地区では、8月咲き「くれない」「さきかぜ」「翁丸」等が、4月13日より定植されている。暮れ植えギクは、「はるき」「はなふさ」「清風」等が栽培されており、4月13日調査で、草丈が「はるき」17.8cm、「はなふさ」18.6cm、「清風」16.6cmと昨年より生長が早い(図3)。病害虫はアブラムシ類が少発、ハモグリバエ類の吸汁痕が4月13日に見られたが微発である。

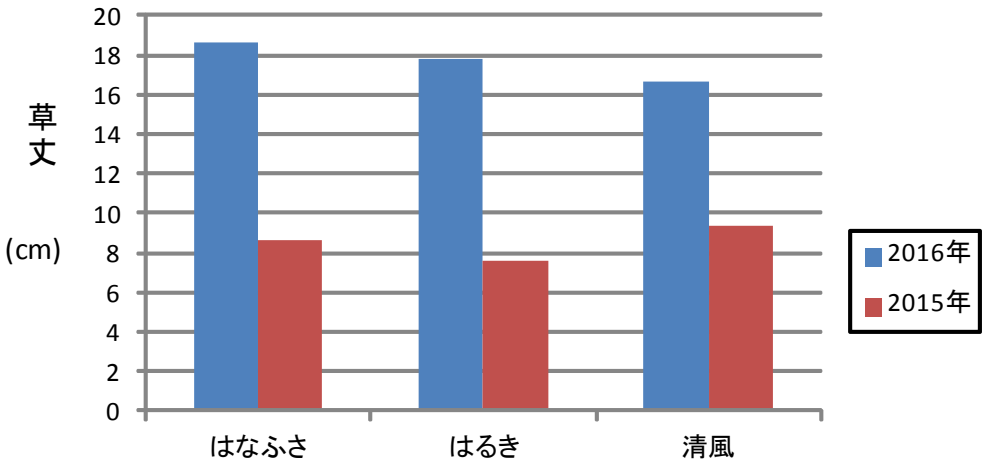

図3 若狭地域の暮れ植えギクの年次別草丈
調査日:2016年 4月13日、2015年 4月20日

2 ユ リ

奥越の1月下旬播種のシンテッポウユリ「オーガスタ」は、4月12日に苗が配布された。定植は4月14日から始まり、和泉地区は4月下旬の予定で約1万5千本植付を計画している。

ＬＡユリの県育成品種「福井ユリ」は、福井市、春江、鯖江で半促成・季咲き栽培が約10,000球作付けされている。据え置き株の一部に葉枯病が見られる。

ＬＡユリの「リリブライトレッド」は、4月15日調査で永平寺の11月定植もので草丈95cmであった。開花は4月上旬から始まった。昨年度は、冷蔵処理後10月上旬定植で草丈98cm、4月上旬から開花していたため、ほぼ同等の開花である。アブラムシが少発生である。

南越では10～12月定植もので草丈10～30cm、一部で摘心栽培が行われ、球根充実後再度掘り上げて冷蔵後再定植が必要である。

春江では11月30日定植の「リリブライトレッド」は草丈86cm、葉数93枚、花蕾数5.7であった。開花は4月17～22日で、昨年より早く、病害虫は一部にアブラムシが発

生している。
福井ユリの目揃え会は、4月25日に開催した。
3月16日定植の「アイランナー」は草丈29cm、9月7日定植の二度切栽培の「ブラックアウト」は草丈31cmで、ほぼ昨年と同等の生育である。

3　トルコギキョウ

あわら市では抑制栽培の切り下株の草丈が「レイナホワイト」で15～20cm、対葉数7～11枚である。病害虫では灰色かび病、炭そ病が微発生である。
大野市では、購入苗の定植が4月中旬に行われた。品種は「ロジーナブルー」「ロジーナーピンク」等である。
越前市では、二度切り栽培の「サルサマリン」が8対葉草丈11cm、「ボヤージュグリーン」が6～7対葉、14cm、「てんてまり」5対葉13cmで、昨年と比較してやや短い。本年は開花が早く、草丈が短い可能性がある。春植えは4月15日頃より定植予定である。
二州地区では4月18日調査で10月下旬に定植された「アンジュラベンダー」4対葉、「プラチナキング」5～6対葉、「あすかの吹雪」7対葉であった。1月14日播種の「ピンクシルエット」「ブルーシルエット」等が4月16、17日に定植されている。
若狭地区では、4月14日調査で3月上旬に播種された「フルフル」シリーズ等は本葉1対目が展開している。1月定植の「ココ」「キキ」は草丈4～5cm、4～5対葉展開中であった。

4　ヒマワリ

永平寺のヒマワリは4月15日調査で3月初旬に播種された「サンリッチ50」が3月下旬に定植され、「オレンジ」「イエロー」の草丈が約30cmである。一部に葉先枯が見られる。

5　シャクヤク

大野のシャクヤクは3月31日調査で、「深山の雪」が3～10cm、「サラベルナール」が8～21cmであった。「華燭の典」が芽立数6.7本、草丈4.5cm、「新珠」が13本、3.6cmと昨年よりやや生育が遅い。病害では勝山地区の一部で、根黒斑病が発生していた。

6　スイセン

各地で冬季のシカ食害がみられた。

7　ストック

小浜の3月咲き作型で、11月下旬定植のアイアンシリーズが3月中下旬に開花、12月上旬定植のカルテットシリーが3月下旬～4月上旬に開花した。病害虫ではコナガが少発生である。

8　その他の切り花品目

福井の二度切栽培の金魚草は収穫ピークを終えた。10月6日播種のスターチス「エキストラ」は収穫間近である。
奥越のアリウム「ギガンチューム」は葉数8～12枚、株径40～50cm、開花は5月中旬見込みである。

越前市のバラは、「ライラッククラシック」「ベビーロマン」が定植された。3月下旬に定植が行われ、活着した見込みである。

若狭で新品目として試作されているカンパニュラ「鈴姫」は 11 月定植ものが草丈 72.8cm で 4 月上旬より開花している。チドリソウ「カンヌ」は、草丈 98cm で 3 月中旬より開花した。スターチス「アメリカンビューティ」は草丈 82.2cm で開花始めである。「イエロービューティ」は 100.4cm で花包が色づき始めてており、開花は総じて早い。

対　策

1　キクの管理

1）夏秋ギクのエスレル処理による開花抑制

（1）7月咲き輪ギク品種の「スーパーイエロー」や小ギク「小鈴」等の品種で実用性が高く、摘心後1～2回のエスレル10を処理することにより、開花の抑制と切り花品質を向上させることができる。品種、作型により開花抑制の効果に差異があるので、注意する。

（2）エスレル10処理の時期は、摘心直後に1回目の処理を行い、2回目は14日後に柔らかい茎葉を中心に全面散布する。ただし、同一品種の開花ピークをずらす場合は、2回目10日後処理と14日後処理を畝別に行う。

（3）高温に遭遇していた苗や老化苗は、エスレル10の効果が低くなる場合があるので注意する。

（4）エスレル10の散布方法は、水道水やきれいな水で500倍に希釈する。散布時期は夕方がよく、葉先から少ししたたり落ちる程度に全面散布する。

（5）調整した薬剤はその日のうちに使用し、他の薬剤（農薬など）との混用は避ける。

（6）異常気象時（高温、低温、多雨、乾燥等）には効果が不安定なので注意する。また散布12時間以内に降雨のない条件で散布する。

（7）本年は盆ギクの開花前進化が危惧されるため、図4を参考にエスレル10を散布する。

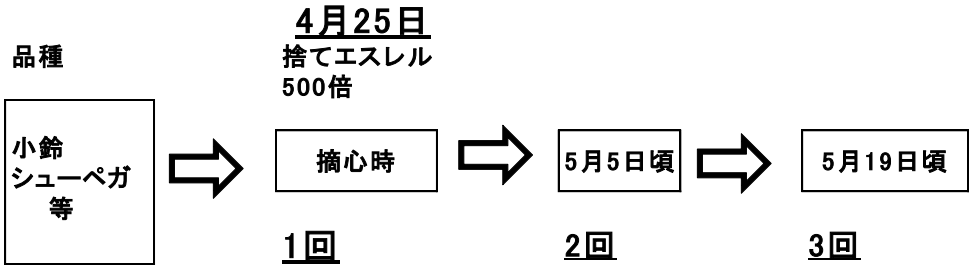

図4　8月咲きキクのエスレル散布モデル例

表１　エスレル１０の散布方法

薬剤名	対象作物	使用濃度	使用時期	使用方法及び注意事項
エスレル10	キク	500～1,000倍	摘心時または定植後1週間以内及びその後10～14日毎	・全面散布（株全体がぬれる程度）使用回数3回以内。
	キク（電照栽培）	500倍	親株摘心時	・早期不時発蕾防止。

２）ハモグリバエの防除

（１）ハモグリバエの防除

ハモグリバエは5月まではナモグリバエ、6月以降に発生する種はマメハモグリバエと優占種が遷移するため、多くの種に効果がある薬剤を選定する。ディアナＳＣ5000倍液を100～300ℓ /10a散布する。ハモグリバエの幼虫が入った葉は二次発生と細菌感染の原因となるため、下葉かきをかねて除去する。できるだけ落とした下葉も圃場から除去する。

2 福井ユリの収穫までの管理

（１）花蕾がのぞいてからは切り花をかたくするため、徐々に灌水を控えるようにするが、極端に灌水を控えると、葉やけの原因となるため注意する（これまでの灌水間隔が毎日なら、週3回というように間隔をあける）。特に曇雨天が続いた後、急激に晴れた時に日焼けしやすい。

（２）生育が進むと地上部が重くなるため、曲がりが出る場合がある。ネット上げが遅れないようにし、支柱の間隔が離れている場合は、補強のために中間に杭を打つ。

（３）萌芽初期に7～10日毎にダコニール1000、アフェットフロアブル、ポリオキシンAL水溶剤で防除するが、生育後半は薬剤による葉の汚れに気をつける。

3 トルコギキョウの管理

（１）定植後の灌水は活着を良好にし、初期生育を促進させるため根が張るまで十分灌水する。特に、花芽分化が始まる本葉8対（草丈が15～20cm）頃までに水分や肥料が少ないと切り花のボリュームが不足するため、積極的に潅水を行う。

（２）２度切り栽培は、草丈が10～20cm時に生育が良い茎を残す整枝を行う。多く茎を残すと切り花のボリュームが小さくなるので、残す茎数は、株当り2本程度とする。

（３）トルコギキョウは根張りが悪いと上葉が小さくなる「うらごけ」がおこる。圃場排水に努め、生育状況をみながら、液肥を施用する。特に春植えは、活着後の生育の状態を見ながら液肥（OKF-1の500～1000倍等）を中心に追肥する。

（４）定植後に生育が停滞し、葉が淡黄色になって枯れる場合がある。これは主に塩類濃度（最適EC0.3～0.5mS）1.0mS以上と高い場合に多く見られる。定植前に土壌調査を行い、ＥＣが高い場合は、水をかけ流したり、表土5cm程度を削りとり、塩類を除去するとよい。

（５）土壌酸度(pH)が低い時も同様な障害が発生する。土壌酸度はpH6.5前後がよく、酸性土壌ではマンガン過剰の症状、上位葉先端や周縁部に黄白斑点、新芽の萎縮が見られる。低pHには薄い石灰水（苦土石灰等の石灰資材を100g／水10ℓ に溶かす）10ℓ を3㎡に土壌施用する。効果が不十分であれば再度施す。

（６）立枯病はフザリウム菌とピシウム菌によるものが主である。フザリウムの病斑は灰白色粉状のかびが密生する。過湿にならないように管理して、丈夫に育てる。発病株は抜取り焼却する。

（７）葉先枯れ対策には、日中に換気を十分行い、軟弱徒長気味の生育をさせない。また、雨や曇天が続いたあとの好天で発生しやすいので、雨や曇天の日は、通風機や暖房機の通風運転で施設内の空気を常時動かすようにする。また、例年発生の多い品種では、カルシウム剤の葉面散布を定植1か月後から1週間ごとに行うとよい。

4　促成スイセンの球根掘り取りと球根の貯蔵前処理

（1）掘り取った球根の乾燥は、高温処理を開始するまでに、球根の表皮が親指の腹で簡単にむける程度まで球根を乾燥させる。乾燥方法は、風通しのよい場所で、陰干しする（写真2）。直射日光があたると火傷状に傷が残り、腐敗の原因となるため、注意する。球根は高温とならないようにする。

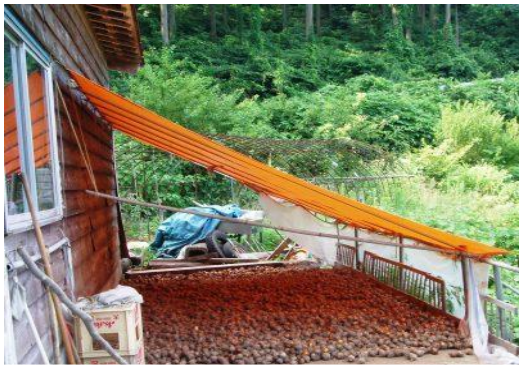

写真 2：球根を乾燥させるには直射日光を避けて、陰干しを行う。